

令和5年度 アイランドキャンパス事業

甌島のウェルビーイングを目指した PBL  
～実体験を通して学ぶアクティブラーナー※の育成～

※学び続け、やり抜く力を持ち、問題発見・課題解決に挑戦する力を備える人

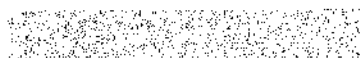
報告書

第一工科大学共通教育センター 倉元 賢一

## 目次

1. はじめに .....	4
1.1. 目的 .....	4
1.2. 事業内容 .....	5
1.3. 実施時期 .....	6
1.4. 実施場所 .....	6
1.5. 参加者 .....	7
2. 活動報告 .....	7
2.1. 日程と概要 .....	7
2.2. 活動の実際 .....	8
2.2.1. 魚さばき体験 .....	8
2.2.2. 試食と懇親会 .....	8
2.2.3. 下甕支所長・林務水産課講話 .....	8
2.2.4. 海星中学校「木育授業実践」 .....	8
2.2.5. 鷹丸（タカエビ漁）見学 .....	9

2.2.6.	手打診療所見学 .....	9
2.2.7.	甌大橋見学.....	9
2.2.8.	勝丸・漁福丸見学.....	9
2.2.9.	かの子幼稚園・下甌保育園見学.....	10
2.2.10.	子岳地区・古民家改修（宿屋○△□）・孤島の野犬の碑見学.....	10
3.	総括.....	10
3.1.	成果と提言 .....	10
3.1.1.	魚さばきによる効果.....	10
3.1.2.	魚食普及活動についての意見や提案 .....	11
3.1.3.	漁業や魚食に対する意識の変化.....	13
3.1.4.	生物育成の授業への影響について .....	14
4.	おわりに .....	15
	謝辞.....	16



## 1. はじめに

### 1.1. 目的

令和5年3月の中央教育審議会による「次期教育振興基本計画について（答申）」では、総括的な基本方針・コンセプトとして、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げている。同答申の中で、ウェルビーイングとは、「身体的・精神的・社会的に良い状態にあることを指し、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含むものである。また、個人のみならず、個人を取り巻く場や地域、社会が持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。」としている。加えて、日本社会に根差したウェルビーイングの向上として、幸福感、学校や地域でのつながり、利他性、協働性、自己肯定感、自己実現と協調的要素と獲得的要素を調和的・一体的に育む日本発の調和と協調（Balance and Harmony）に基づくウェルビーイングを発信することを次期計画のコンセプトにするなど、ウェルビーイングを軸にした教育の展開が期待されている。さらに、我が国の特徴や良さとして、「利他性、協働性、社会貢献意識など、人とのつながり・係性に基づく要素（協調的要素）」がウェルビーイングの実現に重要な意味を有しているとしており [中央教育審議会, 2023]、教育を通してこれらを向上させる取り組みが求められている。

先に述べた「利他性」や「人とのつながり」などの協調的要素を形成するためには環境も重要な要素であると考えられる。原田らは、「教員、保護者や地域住民、そして主人公である子どもたちがスクラムを組むことが新しい効果を生むはずである」とし、離島教育の利点として子ども同士、教員と子ども、地域や保護者との関係において、いずれも親しく積極的な交流が行われているとしている [原田純治 他, 2015]。つまり、ウェルビーイングが目指す協調的要素を実現するのに、離島教育が有利な点も多くあると考えられる。離島教育で問題となるのがキャリア教育である。大脇によれば「島で生活する子どもたちは、将来を漠然と肯定的に捉えていた一方で、自分たちがおかれた環境や、将来島で生活する場合の展望を、比較的シビアに捉えてもいた。」 [大脇和志, 2018]としており、離島ならではの特徴があることを示唆している。この事例は島に高校がない、新潟県粟島の調査であり、子どもたちは日々の生活や学びの中で、現状と希望を俯瞰して見るができるようになっていることが示唆されている。高校進学のために15歳で島を出ることになってしまう粟島の児童生徒は「世界に開かれた自分の将来ではなく、身近な範囲でのローカルな将来像を強く意識しているのは、この地域に根ざすことが明示的にも黙示的にも強調されていると感じ取った結果であるともいえる」 [大脇和志, 2018]としており、離島

におけるキャリア教育の難しさをあげているが、換言すれば協調的要素の向上とも捉えることができる。つまり、日本発の調和と協調（Balance and Harmony）に基づくウェルビーイングを実現する場として、離島教育は有効に作用する可能性があると考えられる。

鹿児島県には大小様々な1,256の離島を有している。その中には先に述べた粟島と同じように、島に高等学校がなく進学のためには15歳でいわゆる「島立ち」をしなければならない甑島がある。甑島列島は、鹿児島県本土に近く、西方約25km、北東から南西へ約35kmに位置しており、人口は令和4年10月1日付で3,860人となっている。第一次産業の内訳は、農業16%、林業0%、水産業84%であり、林業が0%という非常に特徴的な離島である。森林資源は豊富であるが、そのほとんどが広葉樹であるため、木材が産業として成り立つには難しいという実情がある。その反面、水産資源は豊富であり第一次産業のほとんどが水産業という離島ならではの特徴がある。

かつて、下甑島で中学校の教諭として勤務していた経験から、子どもたちと学校が地域社会と調和し協調して生活している場であることを実感している。そこで、将来教師を志す大学生が実際に甑島での実体験を通してウェルビーイングについて課題解決的に学ぶことを目指し事業を企画した。具体的には甑島ならではの実体験（学生にとっては原体験ともいえる）をもとに、ウェルビーイング目指したPBLを行う。

## 1.2. 事業内容

甑島におけるウェルビーイングの実現を目指し、地域住民との交流や実地調査から課題を見つけ、PBL（Project based learning=課題解決学習）を行う。特に人材育成・地域振興の視点で問題発見・課題解決を行う。PBLの過程から得られた様々な“気づき”に着目しながら評価・改善を行い、アクティブラーナーの育成を目指す。加えて、参加学生が教職課程を履修していることから、離島を多く抱える鹿児島県の教育について見聞を拡げ、様々な教育の方法や機会について研修を深める。

今回は特に「木育」の視点から木材の有効利用（甑島に多く群生する広葉樹や古民家や空き家に使われている不定形木材等）や森林教育の有効性についての検討と「漁業への理解・魚食普及」の視点から、漁業の担い手育成と魚食普及に関するニーズと必要性を明らかにする。加えて「島の暮らし」の視点から、手打診療所、かのこ幼稚園、下甑保育園、下甑支所を訪問し、甑島のウェルビーイングとは何かを多面的・多角的な視点から考える。

次年度はPDCAサイクルに則り、課題を解決するための実践とその評価を行い実現可能

な提案をまとめる。具体的には学校を対象として「木育」と「漁業の担い手育成・魚食普及」の視点でカリキュラム提案を行い、学校現場での実践と評価を行う。また、島内の古民家には希少な木材（広葉樹等）が使われていることを例に挙げながら、「木育」の場としての古民家や空き家の利活用の可能性を提案したいと考えている。

成果に関しては、地域住民とのワークショップの中で発表と改善提案の話し合いを行い、地域と大学の継続した連携の方向性についての在り方と今後の方策についてまとめていきたい。そのイメージを図1に示す。



図1 ウェルビーイングを目指したPBLのイメージ

### 1.3. 実施時期

令和5年12月12日（火）～12月14日（木）

### 1.4. 実施場所

木育の実践：薩摩川内市立海星中学校

漁業への理解・魚食普及：手打漁業集落（協力：県林務水産課）、鷹丸・勝丸・漁福丸

島の暮らし：下甕支所、手打診療所、かのこ幼稚園、下甕保育園

## 1.5. 参加者

第一工科大学教職課程4年10名（甌島に関する学修は10名、甌島での現地研修は6名）及び教員1名

## 2. 活動報告

### 2.1. 日程と概要

12月12日(火)																			
6:30	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00	
								フェリー移動		浜北市研修	舟のくらしに 関する体験	夕食	下甌支所の 研修		地元の方々と懇親会			就寝	
12月13日(水)																			
6:30	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00	
朝食	研修・漁業 への研修			視察1・2班			給食	研修	船乗組はフェリー 乗組員との研修 (下甌支所)	延大観光学	上甌観光学		夕食		1日のまとめ		就寝		
12月14日(木)																			
6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	0:00	
						手打漁業集落 (勝丸・漁福丸)	舟のくらしに 関する研修 (下甌支所)	下甌支所		フェリー移動	下甌支所								就寝

今回のアイランドキャンパスは、「木育」「漁業への理解・魚食普及」「島のくらし」の3つの視点から事業を行った。

「木育」では薩摩川内市立海星中学校にご協力いただき、学習指導要領の内容に基づき、木材利用の意識を高めることと木材を使った丈夫な構造を知ることを目的とした授業実践を行った。

「漁業への理解・魚食普及」では、手打漁業集落と鹿児島県林務水産課のご協力をいただき、魚さばき体験と試食、甌島の漁業の概要説明、漁師さんとの懇談をおこなった。また、勝丸・漁福丸・鷹丸にご協力いただき、魚やエビの仕分け作業の見学や試食を体験させていただいた。

「島のくらし」では、下甌支所長の高田様のご協力のもと、手打地区の歴史や島の暮らしの変遷についてご説明いただいたのちに、懇親会を行った。加えて、手打診療所の室原先生に、離島医療の現状についてお話いただいた。また、かのこ幼稚園・下甌保育園の見学などを行い、様々な年代の島の人々のくらしについて触れ、多面的・多角的な知見を得た。

## 2.2. 活動の実際

### 2.2.1. 魚さばき体験



手打漁業集落の皆様のご協力のもと、魚さばき体験をさせていただきました。

### 2.2.2. 試食と懇親会



魚さばき体験後、試食と懇親会を行った。

### 2.2.3. 下甌支所長・林務水産課講話



下甌支所長富田様から島のくらしの変遷について、林務水産課の切通様から甌島の漁業について講話をいただいた。

### 2.2.4. 海星中学校「木育授業実践」



1・2年生を対象に A 材料と加工の技術の中で「木育」を取り入れた構造に関する授業実



践を行った。

#### 2.2.5. 鷹丸（タカエビ漁）見学



鷹丸の下野様にご協力いただき、タカエビ漁についてご説明いただいた。

#### 2.2.6. 手打診療所見学



手打診療所の室原医師に離島医療や島での暮らし、社会インフラとして医療や教育の重要性についてご講話いただいた。

#### 2.2.7. 甌大橋見学



甌島を一つに結ぶ橋である「甌大橋」の見学を行った。

#### 2.2.8. 勝丸・漁福丸見学



手打漁業集落の勝丸、漁福丸のご協力をいただき、水揚げされた魚の流通についてご説明いただいた。また昨今の漁業の現状と問題点についても教えていただいた。

### 2.2.9. かのご幼稚園・下甕保育園見学



園長先生にご協力いただき、幼稚園の給食の時間、保育園のお昼寝の時間を見学させていただきました。

### 2.2.10. 子岳地区・古民家改修（宿屋〇△□）・孤島の野犬の碑見学



子岳地区の姫浦層群、宿屋〇△□の古民家改修、孤島の野犬の碑を見学した。

## 3. 総括

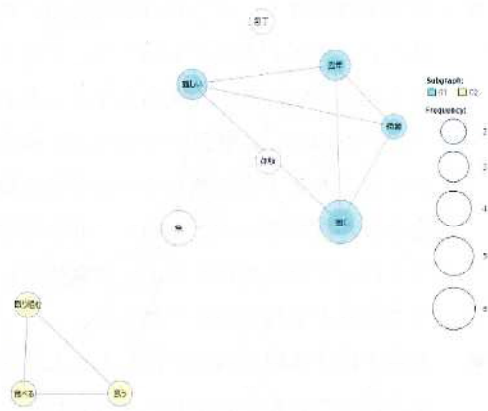
### 3.1. 成果と提言

今回は、「木育」と「漁業への理解・魚食普及」「島のくらし」の3つの視点で事業を展開した。これらの事業を通して得られた学生目線の知見や、島への提言について本稿の最後に付録として掲載する。「木育」と「島のくらし」に関しては、今後研究をまとめ関係学会で発表予定である。「漁業への理解・魚食普及」について特に成果をまとめる。

#### 3.1.1. 魚さばきによる効果

魚さばき講習会の感想及び KHCoder3(3.Beta.07b)を用いたテキストマイニングによる共起ネットワークを下表に示す。

- 今回は、2回目ということもあり、昨年の記憶を思い出しながら取り組むことができた。一つ一つ丁寧に教えていただけて、理解しながら取り組むことでさばき方を身に付けることができたと思う。私は、魚を食べることが好きなので、日常生活でも自分でさばいて食べたいと思った。
- 初めはとても下手くそで見栄えも悪かったが、2匹目を捌く頃にはとても上達し綺麗に捌くことができた、
- とてもためになりました。魚を捌くときの感覚を細かく指導していただき貴重な体験をすることができた。
- 去年に引き続き魚を捌く体験をして去年よりは上手くできたように感じた。普段あまり包丁を使わないので包丁の扱いが難しかったがお手伝いの漁師さんなどのおかげで綺麗に捌くことができてよかったです。
- 去年の講習会から捌いてなかったので、とても難しかった
- 魚捌き2回目でしたが、とても難しかったが、とてもいい経験になりました。



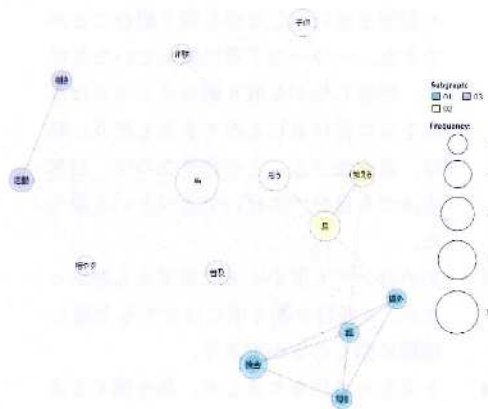
これらの結果から、魚さばき体験の成果として次の4つの点が考えられる。

- 技術の習得と向上：魚の捌き方を学び、実際にそれを行うことで技術を習得した。また、2回目の参加者については、明らかな上達がうかがえる。つまり、継続的な実践による成果が示唆された。
- 自己啓発と自己満足：自分で魚を捌いて食べることを日常生活に取り入れたいと考えた学生も見られた。新たなスキルを習得し生活に活かす意欲につながったと考える。
- 体験の価値：魚を捌くとき細かく指導してもらったことを貴重な体験と評価していることが示唆された。専門的な知識と技術を直接学ぶことの成果ともいえる。
- 挑戦と困難の克服：包丁の扱いが難しかったり、去年の講習会から捌いていなかったりなど、困難に直面したが、結果的には上手に魚を捌くことができるようになった。このような、成功体験は貴重な経験であると考えられる。

### 3.1.2. 魚食普及活動についての意見や提案

魚食普及活動についての意見や提案について KHCoder3(3.Beta.07b)を用いたテキストマイニングによる共起ネットワークを下表に示す。

- 私は県外出身で、はじめは鹿児島県に甕島という島があることも知らず、さばき方を教えていただける機会も今までなかった。このように甕島について知る機会やさばき方を丁寧に教えていただける機会はなかなかないことなので、ぜひ県外でも行っていただけるとより魚食普及につながるのではないかと思った。
- お魚さばき体験を島の子供たちにしっかりと行っていきたいとおしゃっており、その子供たちが島を出た時に周りの子供たちに教えていけるようになれば良いなと思いました。
- とても素晴らしい活動だとおもいました。
- 魚を捌く速さの大会などを開けば楽しく、魚に触れる機会をさらに増やすことができると思いました。
- 魚食活動の一環として魚捌き方教室は参加者も新鮮な経験ができて他の小中学生などを対象にやってみたら魚食がより普及していくと考えた。
- 魚食を普及させるために、子供のうちから魚を捌けるようにしたりするのはすごいことだと思う思った。
- 魚捌き体験の活動の範囲を増やす。

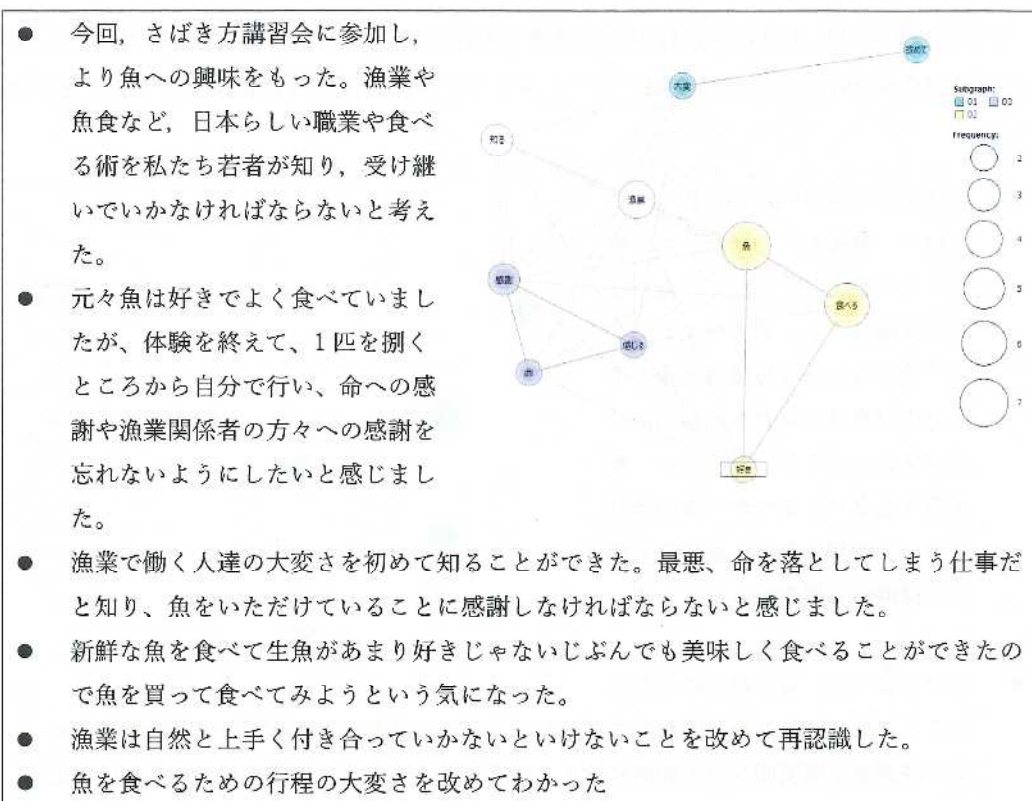


これらのことから、以下のような事項が提案としてまとめられる。

- 県外での活動展開：県外出身者が興味を持っていることから、地域を超えて広がる可能性を示している。魚の捌き方を題材として、魚食文化の普及だけでなく、地域の知識と経験を共有する良い機会となると考えられる。
- 子供たちへの教育：子供たちが島を出たときに、他の子供たちに魚の捌き方を教える力を持つことで、持続可能な普及活動ができると考えている。
- 楽しみながら学ぶ：魚を捌く速さの大会などを開く提案は、学びと楽しみを組み合わせることの重要性を示している。これは、参加者の興味と関心を高め、魚に触れる機会を増やす効果的な方法になると期待できる。
- 対象年齢層の拡大：魚捌き方教室を幅広い年齢層に開く提案は、魚食普及の対象年齢層を広げ、魚食文化をより広範な人々に広めることが期待される。
- 活動範囲の拡大：魚捌き体験の活動範囲を増やす提案は、活動の規模と影響力を拡大することの重要性を示唆している。魚食普及活動がさらに多くの人々に到達し、より大きな影響を与えることを可能になると考えられる。

### 3.1.3. 漁業や魚食に対する意識の変化

漁業や魚食に対する考えや意識の変容について KHCoder3(3.Beta.07b)を用いたテキストマイニングによる共起ネットワークを下表に示す。



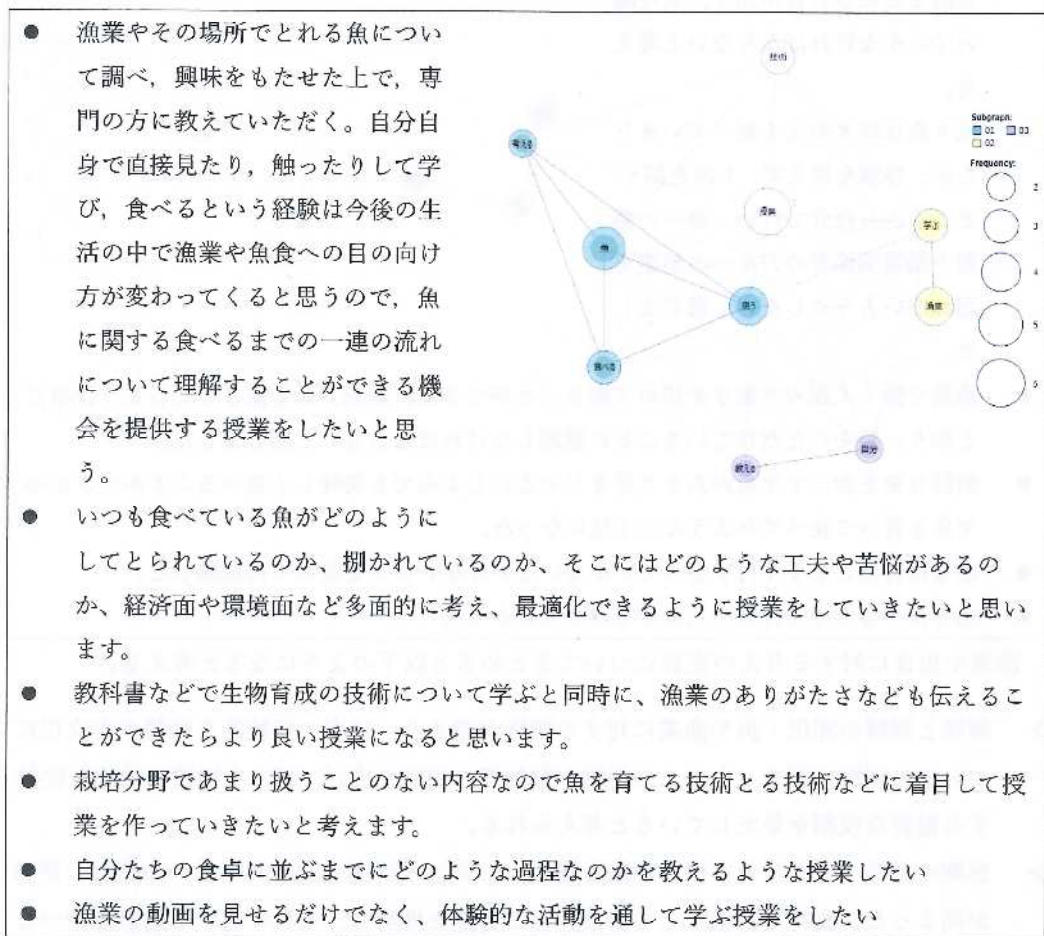
漁業や魚食に対する考えの変容についてまとめると以下のようにになると考える。

- 興味と理解の深化：魚や漁業に対する興味が深まり、日本の伝統的な職業や食文化についての理解が深まった。この活動が参加者の視野を広げ、新たな知識や経験を提供する重要な役割を果たしていると考えられる。
- 感謝の意識：魚を自分で捌く経験を通じて、命への感謝や漁業関係者への感謝の意識が高まった。食物の価値とその背後にある労働を理解し、それに対する敬意を持つことの重要性への気づきとも考えることができ、意義深いものであると考える。
- 漁業の困難さの認識：漁業の困難さと危険性を初めて認識し、魚食に感謝する意識が高まった。これは、食物の供給に対する理解の深化であると考えられる。
- 食生活の変化：新鮮な魚を自分で捌き、食べる経験を通じて、魚を買って食べることに對する意欲が高まった。実践的な学習が生活を見直すきっかけになったと考える。
- 自然との共生の認識：漁業は自然と上手く付き合っていないといけないという事実

の再認識が見られた。持続可能な漁業と環境保全の重要性についての理解が示唆されていると考えられる。

### 3.1.4. 生物育成の授業への影響について

中学校技術の「B 生物育成の技術」で漁業や魚食についてどのように授業したいかについて、KHCoder3(3.Beta.07b)を用いたテキストマイニングによる共起ネットワークを下表に示す。



生物育成の内容の中でどのように漁業や魚食を扱うかまとめると以下のように考える。

- 実体験を通じた学習：専門家から直接学び、自分で魚を見て触って学ぶことで、生徒たちは漁業や魚食について深く理解することができる。
- 多面的な視点：魚がどのように捕獲され、捌かれるかを学ぶことで、生徒たちは漁業の経済的、環境的側面を含む多面的な視点を持つことができる。

- 教科書と現実の結びつき：教科書で学んだことと現実の漁業のありがたさを結びつけることで、生徒たちは理論と実践の間のつながりを理解することができる。
- 新しいテーマの探求：魚を育てる技術や捕獲する技術など、通常はあまり扱われないテーマに焦点を当てることで、生徒たちは新しい知識と経験を得ることができる。
- 食物の供給過程の理解：自分たちの食卓に並ぶまでの過程を体感することで、食物の価値とその背後にある労働を理解することができる。
- 体験的な学習：体験的な活動による深い学びの重要性。

#### 4. おわりに

以上までに述べた学修の成果は、「漁業への理解・魚食普及」に関するものであり、「木育」や「島のくらし」から得られた知見は今後論文として発表予定である。

「漁業への理解・魚食普及」に関する成果だけを見ても、今回の事業で、教師を志す学生たちが地域社会と学校、児童・生徒について俯瞰して見ることができるようになったことは非常に大きな成果であった。コロナ禍に入学し、1・2年生の間はほぼオンラインで授業を受けてきた学生たちにとって、人と触れ合うという経験は非常に大きな意味を持っていることが推察される。後に示す報告書や企画書にも見られるように「人」を中心として、学校や地域振興について考えていることは調和と協調（Balance and Harmony）に基づくウェルビーイングを目指すうえでとても大きな成果があると考えられる。

中学校技術科の授業では「生活や社会における事象を、技術との関わりの視点で捉え、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性などに着目して技術を最適化すること。」[文部科学省, 2017]を重視している。学習過程も既存の技術の理解、課題の設定、設計・計画、課題解決の取り組み、成果の評価を行い、最終的にはよりよい生活や持続可能な社会の構築を目指すものである。これらの学習は机上だけで十分な学習をすることは難しいという側面がある。将来それを教える教師となる学生たちには、様々な経験を基に生徒たちと共に学び続けることができるスキルが求められる。調和と協調に基づくウェルビーイングを実現できる教員を養成するという視点からも、今回のような実体験を伴う学修は必要不可欠であると考えられる。

学生たちのレポートからも本事業が大変意義深いものであったと考えている。人間関係が希薄になりつつあると言われている現代社会で、人との関りを大切にする離島で事業を行うことで、「人」を相手にする教師という仕事の原点のようなものを体感することがで

きたと考える。

ウェルビーイングという新たな教育の潮流を考える上でも、離島における人との関りや教育は日本発の調和と協調（Balance and Harmony）に基づくウェルビーイングを実現する場として、有効に作用する可能性があると考えます。今後も離島の振興に少しでも寄与できるような教育・研究活動を展開していきたい。

## 謝辞

本事業を行うにあたり、計画の立案から実施についてご協力いただいた、下甕支所長富田様、県林務水産課の切通様、海星中学校下中校長先生・市来教頭先生他教職員・生徒の皆様、手打漁業集落の瀧田様、瀧津様、中野様、川添様、池内様、迫田様、宿屋〇〇〇迫田様、手打診療所室原先生、毛井事務長、勝丸の皆様、漁福丸の皆様、鷹丸の皆様、かこの幼稚園、下甕保育園の皆様、その他、下甕島でお世話になったすべての皆様はこの場を借りて重ねて感謝申し上げます。

## 参考文献

- 原田純治 他 . (2015). 離島における教育の実情と課題. 南太平洋海域調査研究報告.
- 大脇和志. (2018). 人口減少時代の離島地域におけるキャリア教育—新潟県粟島の取り組みと小中学生の将来に対する意識に注目して—. 地域と教育：筑波大学博士課程人間総合科学研究科教育学専攻「社会科教育学特講」調査報告.
- 中央教育審議会. (2023年3月8日). 次期教育振興基本計画について（答申）（中教審第241号）. 2024年2月27日 擷取白 次期教育振興基本計画について（答申）；  
[https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt\\_soseisk02-000028073\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230308-mxt_soseisk02-000028073_1.pdf)
- 文部科学省. (2017). 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 技術・家庭科編. 日本: 文部科学省.



---

アイランドキャンパス参加学生のレポート

大学生が考える下甌振興企画書